

学位請求論文審査報告書

氏名 梶 哲 也

論文題目 説一切有部における煩惱論の構造と起点

審査委員 主査 大谷大学准教授 箕 浦 暁 雄

博士（文学）[大谷大学]

副査 大谷大学教授 福 田 洋 一

副査 大谷大学名誉教授 宮 下 晴 輝

副査 佛教大学教授 本 庄 良 文

I. 論文内容の要旨

本論文は、説一切有部における煩惱論の解明を目指したものである。阿含經典には苦悩の原因が様々に説かれる。説一切有部は、その阿含經典に説かれる、苦悩の原因である「欲貪」「有貪」「瞋恚」「慢」「無明」「疑」「見」を「七随眠」という一つのまとまりあるものと見なす。そして、その「七随眠」を軸に、「三漏」「三結」「三縛」など苦悩の原因となる諸々のものをも含めて「九十八随眠」として、煩惱の体系的言説を提示した。

この「九十八随眠」という体系を文献史上最初に確認できるのは『品類足論』『弁随眠品』においてである。「七随眠」というかたちでまとめて扱われたのは、「九十八随眠」という体系から見れば「割に偏りなく整って居る」（櫻部建「九十八随眠の成立について」『大谷学報』127号）と言えるかもしれない。さらに、「七随眠」に見随眠と疑随眠が含まれている」（金敬姫『説一切有部における現観道形成の研究』博士論文、大谷大学、2013年）からであり、「見随眠を「五見」に開くことによって、沙門果の獲得において定式化されている見所断の三結と関連させる」（同上）ことになると言えるかもしれない。

とはいえ、説一切有部が「七随眠」を煩惱論の体系の中心に据えた積極的な理由は何か。説一切有部は、阿含經典に説かれる様々な苦悩の原因をいかなる視点で整理して、「九十八随眠」という煩惱論の体系的言説を提示してきたのか。「漏」などは煩惱の異名や同義語と受け止められてきたが、それらが煩惱論全体のなかでいかなる位置を持つのか検討すべきであり、いまだ多くの課題が残されている。そこで、本論文は、説一切有部の諸論書に見られる煩惱をめぐる記述を整理して、煩惱論の体系の中心に「七随眠」が置かれた理由を明確にしようとした。

本論文の第一章では、阿含經典に説かれる煩惱の異名と煩惱群が説一切有部論書でいかに整理され記述されているかについて検討している。その結果、初期の説一切有部論書から『婆沙論』に至るまで、各々の煩惱群が並列的に言及されていて、各煩惱群の位置付けの差異は判然としない。ところが、『阿毘曇心論』以降では、「漏」「瀑流」「軛」「取」の四つの煩惱の異名を選択的に扱う一貫した記述が見られる。したがって、これらの異名の特徴について検討する必要があることをまず確認する。また、先行研究では「結・縛・随眠・随煩惱・纏」という定型の表現は煩惱の総称と理解されてきたが、いかなる意味で総称と言い得るのか、煩惱論全体のなかでいかなる役割を担うのか再検討すべきであることをも確認している。

第二章では「漏」「瀑流」「軛」「取」という四つの煩惱の異名と、それによって包摂される「三漏」「四瀑流」「四軛」「四取」という煩惱群が、煩惱論の体系においていかに位置付けられているのかを検討している。その結果、説一切有部による煩惱の体系的な記述は、人間に苦悩をもたらす煩惱というものの意味を全面的に受け止め、体系的に言及しようとしてきたことからくる当然の結果であると言える。阿含經典では、この「漏」「瀑流」「軛」「取」の滅尽が、煩惱が断じ尽くされ、苦悩が消滅した涅槃と同義だと理解されている。この阿含經典に見られる理解が説一切有部に継承され、煩惱論の体系に明確に反映されている。有部はこの四つの煩惱の異名に包摂される「三漏」「四瀑流」「四軛」「四取」という煩惱群を、全ての煩惱を包摂する上位の煩惱群として位置付ける。そこで、この四つの煩惱群は、『阿毘曇心論』以降の論書では、煩惱の異名を解説する際にはその冒頭で一つの偈文にまとめて言及される。これは、四つの煩惱群が、阿含經典に説かれてきた全ての煩惱を包摂するものであり、煩惱の概念の枠組を示そうという姿勢のあらわれと考えられる。

第三章では、「結・縛・随眠・随煩惱・纏」という説一切有部論書に見られる定型表現の用法とその意味する範囲を検討する。この定型の表現は、煩惱の総称を意味するであろうとこれまで推測されてきた。「一切結縛随眠随煩惱纏」の煩惱が意味する範囲と、「三漏」の煩惱が意味する範囲とが一致するからこそ、この定型の表現が全ての煩惱を指し示すのであり、煩惱の総称としての意味を担うことを、本論文は明確にした。それに加えて、『識身足論』のなかで、この定型の表現が用いられる煩惱群の分類を検討することによって、「結」「縛」「随眠」「随煩惱」「纏」という五つの煩惱の異名が、それぞれ異なる意味の領域を持つことを確かめている。注意深く文献を読み解くと、「随眠」>「結」「縛」>「纏」>「随煩惱」と、「随眠」が最も広く「随煩惱」が最も狭い煩惱概念であることがわかる。各煩惱がいかなる意味する領域を持ち、どのような性質を持つ

て存在するのか。説一切有部の煩悩論の体系はこの点を考慮のうえ構築されてきたことを、これまでの分析を通して確認している。

第四章では、「結」と「随眠」の二つの概念を取り上げ、説一切有部が煩悩の概念をどのように確定してきたのかを検討している。ここでは、阿含經典『大マールンキヤ経』と説一切有部論書の記述を手がかりに考察がなされる。説一切有部は「結」ではなく「随眠」を煩悩論の軸に据える。「結」には、「繫縛」「合苦」「雜毒」という三つの意義があると『婆沙論』に示される。なかでも四沙門果と関係する「順下分結」の意義は、「合苦」の働きである「生まれを結ぶ」という視点で理解される。この「生まれを結ぶ」ことは、「順下分結」と「随煩悩」とを区別する。そして、説一切有部における「随眠」概念の理解は、煩悩として働いていないが未断であるという点にある。煩悩は潜在的にあるというよりもむしろ、煩悩は未断であるという認識に重きがあることを確認する。

以上の考察に基づき、なぜ説一切有部は煩悩論の軸に「随眠」という概念を選択したのか、その一側面を明確にしたことになる。煩悩は、自分自身と所縁や苦悩や次の生まれなどを結びつける「結」として働く。一方、働いていなくとも未断である煩悩が人間にあると認めるところに立つことこそが、煩悩論の体系の軸として「随眠」を選択した理由である。本論文はこのような結論を提示する。なお、本論文には Appendix として二篇の論考が付されている。本論文の主題に直接関わらない「説一切有部における二種随増について」と「説一切有部における有漏縁・無漏縁について」の二篇である。

II. 論文審査結果の要旨

説一切有部アビダルマの煩悩論に関する研究は多い。1920年代には Louis de la Vallée Poussin が『俱舍論』の解説を發表している。また、2007年に刊行された、小谷信千代・本庄良文による『俱舍論』第5章「随眠品」の解説研究によって、『俱舍論』「随眠品」とヤショーミトラの註釈文を容易に参照することができるようになった。もっとも、それ以前から俱舍学の伝統を受け継いできた日本には煩悩論に関する多くの研究成果がある。しかし、それでもなお多くの課題が残っている。初期經典で煩悩について語られてきたことがいかなる視点で整理された結果、説一切有部の煩悩論が構築されてきたのか。とりわけ、このことが明確にならないかぎり、我々が煩悩論を十全に把握したとは言い難い。本論文は、その根本的な課題に迫ろうとした研究である。

『婆沙論』以前の説一切有部論書『集異門足論』『法蘊足論』『識身足論』『界身足論』『施設論』

『品類足論』には、複数の煩惱が法数によって並記されるのみで、それら諸煩惱が体系的に語られはじめるときの着想は捉え難い。そこで、本研究は、まず、「漏」「瀑流」「軛」「取」の四つの煩惱と、「結」「縛」「随眠」「随煩惱」「纏」の五つの煩惱とが分けて扱われてきたことを見極めている。ここに本論文の第一の特徴がある。「漏」「瀑流」「軛」「取」の四つの煩惱が、他のすべての煩惱を包摂する上位のものとしての位置を持つ。それでは、『品類足論』の「云何が有漏なるや。謂わく。色無色界の無明を除く諸の餘の結・縛・随眠・随煩惱・纏、是を有漏と名く。」(『婆沙論』卷第四十七 大正新脩大藏經 243c28-29) という記述をいかに了解すればよいのかと『婆沙論』は問う。この問いに対して、『品類足論』の記述を矛盾なく了解できると説一切有部は主張する。ここに「結」「縛」「随眠」「随煩惱」「纏」ではなく、「九十八随眠」と「十纏」の枠組ですべての煩惱を包摂する体系を構築するための解釈の転換があるように思われる。本論文がこの転換点を見定めたことはきわめて重要であるが、アビダルマの歴史のなかでこれがいかなる意味を持つのかさらに明確に説明しておく必要がある。

本研究における第二の特徴は次の点にある。「結」「縛」「随眠」「随煩惱」「纏」の五つの煩惱の意味する領域が「三漏」と同じであるから、すべての煩惱を包摂するという点で煩惱の総称だと言ってよいことを、『集異門足論』を手がかりに明確にした。そして、『識身足論』の記述を整理して、「随眠」が最も広い意味領域を持ち、五つの煩惱はそれぞれ「随眠」>「結」「縛」>「纏」>「随煩惱」の順に意味する領域が異なることを明らかにしている。『識身足論』は、それぞれの煩惱を単に法数によって分類するのではなく、各煩惱がいかなる意味する領域を持ちどのような性質を持って存在するのかを分析している。本論文がこれを整理したことには十分な意味がある。『識身足論』の分析的な説明を読み解くことが、アビダルマ研究において非常に重要であることが改めて示されたと言ってよい。

そして、本研究の第三の特徴は、『婆沙論』に基づき、「随眠」という煩惱のあり方を潜在的だと言うのではなく、未断だと捉えるところにこそ、説一切有部の煩惱論の核心があると見定めようとしたところにある。仏道の歩みが開始されるということは、苦悩の原因となるものが未断であるという認識があるからにほかならない。煩惱論の体系的な言説の展開もまた、この認識を中心に置いている。本論文は、我々にこのことをアビダルマの煩惱論を通して再認識させてくれる。ただし、本論文が示す論拠は決して十分とは言えない。『婆沙論』や『俱舍論』のなかで引かれる『大マールンキヤ経』の解釈については、審査委員からさらなる検討の必要があるとの指摘がなされた。このパーリ語経典そのものの文脈は、これまでの研究では潜在的な煩惱と理解されてき

た。この經典の一節を、煩惱が未断であるか否かの問題ということに力点をおいて「随眠」の語を解釈するための根拠と見なすためには、「随眠」の解釈をめぐって未断の煩惱が存在すると『婆沙論』などが主張しようとしていることを明確に示す必要がある。あるいはまた、「七随眠」から「九十八随眠」への展開を見定めることができたとしても、そこから「結」の概念が修道論上のような働きを持つのかをあらためて明確にしておく必要がある。煩惱論の体系から修道論をどう評価するのかという問題が残っている。さらには、煩惱論の体系と、『俱舍論』などに見られる有漏か無漏かという分析的な記述とを、いかなる関係にあると読み解くのか。「九十八随眠」と心所法（心相応法）に包摂される大煩惱地法・大不善地法・小煩惱地法との関係をいかに整理しておいたらよいか。これらのことも今後の課題である。

本論文は、文献の取り扱い方や論説の仕方にさらなる工夫や修正が必要であろう。また、原典の校訂と翻訳文について訂正すべきところが見受けられる。有益な参考文献が未見であることについても指摘しておく必要がある。これらの点は惜しまれる。古代インド仏教思想に関するこのような研究領域は、きわめて難解な内容を扱っており、専門家でない者が内容を十分理解することは困難であるけれども、広く思想研究者に開かれていくように可能な限り明解に研究成果を提示することが求められる。本論文にはさらなる改善が必要であり、評者自身もまた肝に銘じておかなければなるまい。

以上の通り、本論文は、説一切有部における煩惱論の体系の一側面を明らかにしようと試み、難解な記述を整理している。これは高く評価できる。煩惱論の体系がどのように構築されていたかを読み解くために、何に注目すればよいかを本論文は示したことになる。煩惱論の体系がすべて明らかになったとは言えないまでも、今後のアビダルマ研究の見通しを立てたという意味においても、本論文に対して十分な評価が与えられてよい。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2018 年 1 月 15 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、梶哲也に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。